

サンプル版

スケベ短編 06

アヘッて寸止めノンケ No20

男前剣道部員 S

作者：金目

目次

製品版概要.....	2
登場人物.....	3
第1話 Chapter.1 翔貴くんインタビュー より抜粋.....	3
第2話 Chapter.2 喘ぎまくり翔貴くん より抜粋.....	6
奥付.....	10

製品版概要

登場人物紹介

第1話 Chapter.1 翔貴くんインタビュー(インタビュー、全裸)

第2話 Chapter.2 喘ぎまくり翔貴くん(寸止め)

第3話 忘我の皮オナ連続絶頂 ペーパーゼロのピンチ(連続皮オナ)

このサンプル版では、第1話、第2話の抜粋を掲載しております。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実中存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたA I・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

登場人物

望月 翔貴（もちづき しょうき）

某体育大学剣道部部員。男。22歳。童貞。

平常時 14.6cm、勃起時 24.4cm の仮性包茎。

撮影スタッフにナンパされ、報酬目当てに寸止め手コキシリーズ『アヘッて寸止めノンケ』に出演した。

第1話 Chapter.1 翔貴くんインタビュー より抜粋

「はじめまして、翔貴です」

望月翔貴は、公園の駐車場でカメラに向かって挨拶をした。

ワゴン車の前に立つ翔貴はTシャツとハーフパンツ、ランニングシューズにサングラスというラフな格好をしている。

ハーフパンツから伸びる脚は筋肉のメリハリがくっきりと浮かんでおり、武骨さがにじみ出ている。

脛には毛が生えていない。

Tシャツは胸筋や肩の筋肉で盛り上がり、袖から伸びる腕も筋肉のメリハリがくっきりと浮かんでいる。

翔貴を撮影しているのは、ゲイ向けエロ動画撮影会社のスタッフだ。

そして、翔貴の背後には、ゲイ向けエロ動画撮影会社のワゴン車が駐車してある。

翔貴が出演するのは『アヘッて寸止めノンケ』というシリーズで、撮影スタッフの説明によると、ノンケの寸止め手コキ動画だという。

撮影の流れは、ワゴン車の前で自己紹介の撮影をし、ワゴン車の中で寸止め手コキ動画を撮影する、ということだ。

自慢なのだが、翔貴は己のチンポをデカチンだと思っている。

少なくとも、翔貴は己よりも格上のフル勃起デカチンを見たことは、2回しかない。

翔貴のチンポがデカいため、男友達や剣道部の先輩たちにデカチンを揉まれ、軽くシコられ、勃起させられることは日常茶飯事であり、翔貴はデカチンだから仕方ないよな、と軽く受け止めていた。

故に、寸止め手コキの様子を撮影されることを、翔貴はちょっとしたサービスぐらいにしか思わない。

提示された報酬が魅力的だったこともあり、サングラスを装着したままの撮影ならば、と勧誘を受け入れたのだ。

「翔貴くんですね、年齢と身長、体重を教えてください」

「年齢は 22 歳、身長は 178cm、体重は 79kg です」

撮影スタッフの問いに、翔貴はハキハキと返事をした。

「翔貴くんは、腕や脚がごっついのですが、スポーツは何かしていますか？」

「剣道をやっています」

翔貴は、日課の素振りの仕草をやって見せた。

何年も繰り返し行い、身体に染みついた素振りの動作は堂に入っており、竹刀を持たずとも剣道選手としての気迫が伝わるようであった。

翔貴が素振りの仕草をするたび、Tシャツの袖がはためき、濃い腋毛がチラチラと見え隠れする。

「なるほど、剣道ですか。」

道理で堂々として、男らしいわけですね。

まさに、大和男子ですね」

「ありがとうございます」

撮影スタッフの称賛に翔貴は笑みを浮かべて礼を述べた。

翔貴への称賛は、まぎれもない本心だろう。

身長が高く、筋肉もゴツゴツと分厚く屈強な翔貴は、剣道によって磨かれた所作に弛みはなく、堂々としている。

アイドルのような華やかさこそないが、翔貴には人目を惹くに足る魅力が確かに備わっているのだ。

「では、Tシャツを脱いで、上半身を見せてください」

「はい」

撮影スタッフの指示に従い、翔貴はTシャツの襟を掴んでぐいっと持ち上げる。

竹刀を振るう腕を支える腹部がぎゅっと引き締まり、筋肉の厚みがくっきりと出ている。

Tシャツの上からでも分かる胸板の厚みは城壁のような力強さが備わっている。

翔貴は、サングラスを引っかけないように気をつけながら、Tシャツを脱いだ。

「凄いですねー」

撮影スタッフが感心した様子で目を見開いている。

「ありがとうございます」

翔貴は、Tシャツを駐車場のアスファルトの上に落としてから、礼を述べた。

「これほど分厚い胸筋なら、ビクビクさせることはできますか？」

「できますよ」

撮影スタッフの問いかけに翔貴は頷き、腰に手を当てて、大胸筋に力を入れた。

ビクッビクッと翔貴の大胸筋が震える。

「すごいですねー！

いえ、本当にすごい！

合コンとかで女の子たちに褒められるでしょ？」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は首を振った。

「いえ、うちの剣道部の半数はこれができるので、新鮮味がないって言われますね」

「なるほど。」

それは残念ですね」

撮影スタッフの言葉に、翔貴は苦笑いを浮かべた。

翔貴自身、大胸筋をビクビクさせられる者が周囲に多くいる環境なので、大胸筋をビクビクさせることを褒められても、難しいことではないし、と謙遜してしまうのだ。

「では続いて、ハーフパンツを下ろしてもらえますか？」

「分かりました」

撮影スタッフの指示に従い、翔貴はハーフパンツの紐を緩め、下ろした。

ハーフパンツを下ろしたことにより、翔貴の白ブリーフが露わになった。

撮影スタッフが小さな声で「お」と呟き、目を見開いた。

翔貴は、親が選んだ白ブリーフからの卒業をし損ねたまま、大学4年目を迎えたのだ。

最も、撮影スタッフが声を上げたのは白ブリーフそのものではない。

ハーフパンツを下ろすため、膝をかるく曲げ、腰を引いているというのに、翔貴の白ブリーフはぼごとと目立っているのだ。

翔貴のデカチンが白ブリーフを押し上げ、大きなもっこりとして突き上げているのだ。

翔貴は、撮影スタッフの呟きを耳にし、少しだけ唇を動かした。

翔貴は、己のデカチンを自慢に思っている。

だから、初対面の男が翔貴の白ブリーフもっこりに驚く様子は、翔貴にとって称賛に等しいことなのだ。

翔貴は、ハーフパンツを足から引き抜くと、ポケットに入れたスマートフォンが傷つかないようにそっと置いた。

「どうでしょうか？」

翔貴は腰に手を当て、胸を張った。

翔貴の白ブリーフは、いかにも親が選んだというダサい白ブリーフである。

けれど、翔貴のデカチンによって押し上げられたもっこの大きさと高さにより、ダサいはずの白ブリーフに、独特のエロさが漂っている。

よく見ると、翔貴の白ブリーフのもっこりには黄色っぽい染みが浮かんでいる。

平常時が仮性包茎の翔貴は、包皮をきちんと向かずにションベンをすることがあり、包皮に残ったションベンがそのまま白ブリーフの染みとして残っているのだ。

「チンポが大きいって、よく言われるでしょ？」

「ええ、そうですね」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は普通に返答した。

デカチンと言われることは、翔貴にとって日常茶飯事であり、大袈裟に喜ぶほどのことではないのだ。

「白ブリーフには何か、拘りがあるのかな？」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は苦笑いを浮かべて首を振った。

「えっと、高校の剣道部でのことなんですけどね。

2年年上の先輩に、命令されちゃったんですよ。

白ブリーフ以外のパンツを穿くなって。

デカチンでおしゃれパンツとか生意気が過ぎるって。

まあ、それで大学に入るまで白ブリーフ確定だったんで、もう、このままでいいかなって」

翔貴が説明をすると、撮影スタッフが少しだけ首を傾げた。
「こっそり、お洒落なパンツを穿こうとは思わなかったのかな？」
撮影スタッフの問いかけに、翔貴は首を振った。
「思いませんでした。
尊敬できる先輩でしたし、剣道の腕も部活一だったんで、従うのも当然というか。
それにほら、デカチンを弄られるのって、男同士のコミュニケーションじゃないですか。
尊敬できる先輩直々のデカチン弄りだから、結構いい思い出です」
撮影スタッフの問いかけに翔貴が返答すると、撮影スタッフが「なるほどー」と感心した様子を見せた。
「確かに、翔貴くんのもっこりはかなり大きいし、デカチン弄りがコミュニケーションっていうのも納得できますね。
横から撮影するので、その姿勢のままでいてくれるかな」
「分かりました」
撮影スタッフの指示に従い、翔貴は腰に手を当て、胸を張った姿勢を保持する。
体側に回り、しゃがみこんだ撮影スタッフが「おお」と驚きの声を上げている。
翔貴の体側から見ても、白ブリーフのもっこりがかなり大きく突き出ているのだ。
デカチンの見本のような白ブリーフのもっこりを前にして驚く撮影スタッフの様子は、翔貴にとってよくあることであった。
「いやあ、凄いですね。
この仕事でも、ここまでのデカチンはなかなかお目にかかれませんよ」

第2話 Chapter.2 喘ぎまくり翔貴くん より抜粋

「では、24cmのデカチンの翔貴くんを、これから寸止めしますよ」
撮影スタッフがそう告げると、翔貴のフル勃起デカチンを軽く握った。
そして、ゆっくりとローションを滑らせながら翔貴の亀頭から根本まで手を往復させる。
「おっ！」
思いもしなかった快感に翔貴は短く呻き、腰を浮かせた。
男友達や剣道部の仲間たちに日常的に手コキで勃起させられている翔貴は、手コキをされることに慣れている、と思っていた。
けれど、男友達や剣道部の仲間たちの手コキの目的は勃起させることであって、翔貴をイカせることではない。
翔貴は、男に快感を与えるための手コキを施された経験はないのだ。
一方、ゲイ向けエロ動画撮影スタッフは男に性的快楽を与え、善がらせることが仕事である。
チンポに快感を与え、善がらせることに慣れている撮影スタッフの触り方は、翔貴にとって刺激的なのだ。
撮影スタッフの手の動きが急に早まる。

「おおおおおっ！」

翔貴は座席に腕を突っ張らせ、腰を大きく浮かせてしまう。

撮影スタッフが手の動きを止めた。

「あー……」

翔貴は息を吐き、腰を座席に下ろす。

「気持ちいいぐらいに敏感だね。」

翔貴くんとデカチンコミュニケーションしている子たちも楽しんでいるだろうね」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は曖昧な笑みを浮かべた。

撮影スタッフのいやらしい手コキに比べたら、男友達や剣道部の仲間たちによる手コキは、ただの接触でしかない。

そう感じる一方で、手コキされることに慣れている、と言ってしまった手前、撮影スタッフのテクニックを認めることは、翔貴には恥ずかしかったのだ。

「ええ、まあ……」

翔貴は、言葉を濁しながら頷いた。

「じゃあ、もうちょっと手コキを愉しもうね」

撮影スタッフがそう告げ、翔貴への手コキを再開した。

ゆっくりと陰茎の根本から手を動かされるだけで、翔貴は首を逸らし、喉仏を浮かび上がらせる。

雁首のあたりを包皮の上から小刻みに擦られると、「おっおっ！」と翔貴は喘ぎ、身体を震わせる。

「皮を剥いてもいいかな」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は頷いた。

撮影スタッフが翔貴の包皮をゆっくりと剥いていく。

皮オナによって守られている深窓の童貞ピンク亀頭がぬるりと露わになった。

撮影スタッフが手を離しても、翔貴の包皮は雁首に留まったままだ。

「綺麗なピンク色だね。」

もしかして、童貞かな？」

「はい……」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は頷いた。

「デカチンで童貞かー。」

でも、こんなに立派なチンポなら、絶対にガチエロ株式市場で一部上場チンポ間違いなしだよ」

撮影スタッフの言葉は誉め言葉なのだろうが、株や投資に興味のない翔貴には、どの程度の誉め言葉なのか判断がつかなかった。

「それじゃあ、ローションを追加しようか」

撮影スタッフが、翔貴の亀頭にローションを垂らした。

「ひうっ！」

ローションの冷たさに翔貴は短く悲鳴を上げ、腹筋をぎゅっと引き締めた。

翔貴は、皮オナしかしたことがない。

そのため、亀頭への直接的な刺激に対する経験がなく、備えることもできなかったのだ。

ローションが亀頭をぬるぬると濡れ落ちるだけで、翔貴は目を閉じ、身体を震わせてしまう。

「ローションだけなのに、敏感だね」

「すいません……」

撮影スタッフの言葉に、翔貴は震えながら頭を下げた。

「いやいや、敏感な男の子の需要はたくさんあるからね。」

「じゃあ、ちょっと撫でてみようか」

撮影スタッフの指が、翔貴の鈴口のあたりをゆっくりと撫で始めた。

「ああっ！ ヤバイ！」

ゾワゾワとした快感に翔貴は目を閉じて首を振った。

亀頭を直接撫でられた感覚の恐ろしさに、翔貴はケツを座席に擦りつけながら腰を引いた。

「敏感だねえ。」

「もっともっと、いっぱい、喘がないと駄目だよ」

撮影スタッフが翔貴のフル勃起デカチンを掴み、再び亀頭に指先を近づける。

翔貴は目を閉じ、歯を食いしばり、亀頭責めに備える。

翔貴の心臓が、緊張によりバクバクと脈打っている。

翔貴は、亀頭責めの覚悟を固めている。

けれど、亀頭への接触がない。

少しして、翔貴は目を開けた。

撮影スタッフがにやっと笑い、翔貴の剥きだしの亀頭をぎゅっと握り込んだ。

「おおおおおおおう！」

翔貴は腕を突っ張り、分厚い胸板をボンと弾ませ、喉仏が浮かぶほどに首を逸らし、無様に喘いだ。

撮影スタッフが翔貴の剥きだしの亀頭を握り込んだまま、掌をぐりぐりと回し始めた。

「だめっ！ だめだっ！ だめえ！ だめだあっ！ おおっ！ ああ！」

撮影スタッフの掌の回転に合わせ、翔貴は身体を震わせ、喘ぐ。

こんな快感を、翔貴は知らない。

皮オナしかしたことのない翔貴にとって、亀頭を直接ぐりぐりと責められるのは初めてのことであり、喘ぎ声を押さえきれないほどの快感になるとは、予想もしなかったのだ。

翔貴は腰を引いて亀頭責めから逃れようとする。

けれど、撮影スタッフにフル勃起デカチンを握られているので、亀頭責めから逃げられない。

ぐりっぐりっぐりっ、と撮影スタッフによって亀頭を掌で責められるたび、翔貴は身体を右に振じり、左に振じり、分厚い胸板をボンと弾ませて悶える。

「ちょ！ ちょっとタイム！」

耐えかねて翔貴は、小休止を要求してしまった。

「そんなに気持ちいいかい？」

撮影スタッフの問いかけに、翔貴は大きく何度も何度も頷く。

翔貴の顔は予想外の快感に火照っている。

奥付

サンプル版 『スケベ短編06 アヘッて寸止めノンケ No20 男前剣道部員S』

初出：2026 年 04 月 27 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。